

全角運動量が保存するために,

$$[\hat{H}, \hat{\mathbf{L}} + \hat{\mathbf{S}}] = 0 \quad (0.0.1)$$

なる物理量として, スピン  $\hat{\mathbf{S}}$  が存在すると考える. スピン演算子を,

$$\hat{S}_x := \frac{\hbar}{2} \begin{pmatrix} \sigma_x & 0 \\ 0 & \sigma_x \end{pmatrix} \quad (0.0.2)$$

$$\hat{S}_y := \frac{\hbar}{2} \begin{pmatrix} \sigma_y & 0 \\ 0 & \sigma_y \end{pmatrix} \quad (0.0.3)$$

$$\hat{S}_z := \frac{\hbar}{2} \begin{pmatrix} \sigma_z & 0 \\ 0 & \sigma_z \end{pmatrix} \quad (0.0.4)$$

ただし,  $\sigma_i$  ( $i = x, y, z$ ) は Pauli 行列である. このようにスピン演算子を導入すると, これらは  $\alpha_i$  や  $\beta$  との交換関係において,

$$[\alpha_i, \hat{S}_j] = i\hbar \varepsilon_{ijk} \alpha_k \quad (0.0.5)$$

$$[\beta, \hat{S}_i] = 0 \quad (0.0.6)$$

を満たすため,

$$[\hat{H}, \hat{S}_x] = i\hbar c(\alpha_y \hat{p}_z - \alpha_z \hat{p}_y) \quad (0.0.7)$$

$$[\hat{H}, \hat{S}_y] = i\hbar c(\alpha_z \hat{p}_x - \alpha_x \hat{p}_z) \quad (0.0.8)$$

$$[\hat{H}, \hat{S}_z] = i\hbar c(\alpha_x \hat{p}_y - \alpha_y \hat{p}_x) \quad (0.0.9)$$

が得られる.  $\hat{\mathbf{S}}$  の定義より,

$$[\hat{H}, \hat{S}_i] = -[\hat{H}, \hat{L}_i] \quad (0.0.10)$$

であるため,

$$[\hat{H}, \hat{L}_x + \hat{S}_x] = [\hat{H}, \hat{L}_y + \hat{S}_y] = [\hat{H}, \hat{L}_z + \hat{S}_z] = 0 \quad (0.0.11)$$

が成り立つ. よって, Dirac 方程式において

$$[\hat{H}, \hat{\mathbf{L}} + \hat{\mathbf{S}}] = 0 \quad (0.0.12)$$

であり, **全角運動量**  $\mathbf{J} := \mathbf{L} + \mathbf{S}$  が保存されることがわかる. ただし,  $\mathbf{S} = \frac{\hbar}{2} \boldsymbol{\sigma}$  は**スピン角運動量**である. まとめる  
と, 非相対論的量子論では軌道角運動量  $\mathbf{L}$  が保存量であった. しかし, 相対論を取り入れた Dirac 方程式ではスピン  
角運動量  $\mathbf{S}$  も含めた全角運動量  $\mathbf{J}$  が保存量なのである<sup>1</sup>. 以上の議論では, スピンの存在が自然に導入された. この  
議論に用いた要請は,

スピンの存在のために用いた要請

1. Lorentz 共変性
2. 状態の時間発展が時間の 1 階微分で表されること

である. 1. は Schrödinger 方程式と相対論の矛盾を解決するために用いた. 2. は波動関数の確率解釈を可能にするために用いた. 以上の要請から Dirac 方程式が導かれ, その式にはスピンの存在が内包されていた.

<sup>1</sup> これを実験的に確かめたのが **Einstein - de Haas 効果** や **Barnett 効果** である. 前者は, 強磁性体の磁化の向きがそろった時, つまりスピン角運動量が変化するとき, 強磁性体全体が力学的回転をするというものであり, Einstein が生涯で行った唯一の実験と言われている. 後者は, 逆に, 力学的回転により磁化の向きがそろうというものである. これらは**磁気回転効果** (gyromagnetic effect) と言われている. 磁気回転効果は常磁性体, 核スピン, 液体金属流体, 常磁性金属薄膜, 強磁性金属薄膜, クォーク・グルオンプラズマでも観測されている.

式 (??) から式 (??) で表した Dirac 方程式の平面波解と,  $\hat{S}_z$  の関係を調べる. 平面波解に  $\hat{S}_z$  を作用させてみると,

$$\begin{cases} \hat{S}_z \psi_{\uparrow}^+ = \frac{\hbar}{2} \psi_{\uparrow}^+ \\ \hat{S}_z \psi_{\downarrow}^+ = -\frac{\hbar}{2} \psi_{\downarrow}^+ \end{cases} \quad (0.0.13)$$

$$\begin{cases} \hat{S}_z \psi_{\uparrow}^- = \frac{\hbar}{2} \psi_{\uparrow}^- \\ \hat{S}_z \psi_{\downarrow}^- = -\frac{\hbar}{2} \psi_{\downarrow}^- \end{cases} \quad (0.0.14)$$

が成り立つ. よって, 平面波解は  $\hat{S}_z$  の固有状態であることがわかる.  
全角運動量以外の保存量としてヘリシティがある<sup>2</sup>.

$$\mathbf{S} = \begin{pmatrix} \boldsymbol{\sigma} & 0 \\ 0 & \boldsymbol{\sigma} \end{pmatrix} \quad (0.0.15)$$

として, ヘリシティは

$$h = \frac{\mathbf{S} \cdot \mathbf{p}}{|\mathbf{p}|} \quad (0.0.16)$$

と定義される. これが保存量であることは以下のように確かめられる.

$$(\boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{p}}) \hat{h} = \frac{1}{p} \begin{pmatrix} 0 & \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}} \\ \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}} & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}} & 0 \\ 0 & \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}} \end{pmatrix} \quad (0.0.17)$$

$$= \frac{1}{p} \begin{pmatrix} 0 & (\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}})(\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}}) \\ (\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}})(\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{p}}) & 0 \end{pmatrix} \quad (0.0.18)$$

$$= \frac{1}{p} \begin{pmatrix} 0 & \hat{\mathbf{p}}^2 \\ \hat{\mathbf{p}}^2 & 0 \end{pmatrix} \quad (0.0.19)$$

$$= \hat{h}(\boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{p}}) \quad (0.0.20)$$

よって

$$[\boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{p}}, \hat{h}] = 0 \quad (0.0.21)$$

$$[\beta, \hat{h}] = 0 \quad (0.0.22)$$

したがって,

$$[\hat{H}, \hat{h}] = 0 \quad (0.0.23)$$

ヘリシティは保存量である.

<sup>2</sup>授業では触れていない.